

仏典を読む (十)

法華經をめぐって

島田 美穂

源氏物語の女主人公、紫の上は死期が近いことを感じて、一日、法華經千部供養の法要を催し、親しい人々を招いて、それとなく別れを告げる。物語中の最高の人、藤壺の最後を「灯の尽きるように」こと切れたとあるのを、源氏の權威、清水好子氏は「源氏の女君」のなかで、法華經の仏入滅にも比そうとする作者のころがうかがわれる、と言われている。源氏物語の中に仏教や仏典に関係のある場面やことばを探し出せば切りがなく、空蟬、薄雲、御法、幻、夢浮橋などという巻々の名にも、仏教思想の影響が濃い。源氏より一世代下った更級日記の作者、藤原孝標の娘は少女の時、物語にうつつを抜かして読みふけり、夢に僧が現

れ「法華經五巻をとく習え」と告げるのもかえりみず、むしろ反抗的であったのが、晩年になって信仰に熱心になり、寺にこもり、夢うつつに金色に光り輝く阿弥陀仏が、すぐ目のあたりに蓮華の坐に立つ姿を拝むほどになる。

今日まで一世紀余り、近代西洋文化の圧倒的な影響の下にあった我々にとって、仏典の世界は遠く、語ることが困難になっているが、平安末期までは日本の知識人は漢文の「大蔵經」を読みこなし、心の糧としてきた。万有は無であり幻であると説き、現象界の無常迅速を強調する大乘仏教の教えは人々の意識に滲透して、美術や文学に大きな影響を与え、日本文化を特徴づけたことは確かである。

突然仏典を読まなければならぬ破目になって、今更のように気付かせられたことは多いが、まずその第一は、お経が外国語であったことである。千数百年もの長きにわたって、我々の文化の中で生きてきたお経は、漢文で書かれており、そのまま誦まれてきた。このことは外国語を媒介として、外国文学を読むものにとっては、根元的な興味をひく問題を含む。その外国語のテキストはどこまで正確に読まれ、異質の風土に発達した思想内容はどこまで理解され、どのように同化されたか。そこに何が残り、何が新たに創り加えられたか、ということを始めとして、現状への反省や未来への問いかけを誘って止まないものがある。

西洋の思想の主流をなすキリスト教の聖典が、新旧の聖書のみであるのに比べて、仏典の量の何と膨大で、おびた

だしい種類にわたっていることであろう。大乘仏教の經典の中では、般若經、法華經、維摩經、無量壽經、華嚴經などの名は我々の耳にも親しい。中でも空の哲学のエッセンス、般若心經や、美しいイメージで構築されたような観無量壽經などは現代人にとっても魅力的であろうが、私は平安朝文学の中で、名のみであるが、親しみある法華經を覗いてみることにする。

岩波文庫の三卷「法華經」には、西域の人、クマラージ―ヴァによる漢文の名訳「妙法蓮華經」及びその書き下しとサンスクリット語原典からの邦訳口語の「正しい教えの白蓮」、が対照されている。勿論、素人が一読しただけで、教義的な深い意味が理解できる筈もないが、まずお経の内容は思いもかけないほど、清新で明晰、白蓮のイメージにふさわしい、すがすがしい読みものであった。そこには人智に絶する無限、永遠の思想が、自由奔放かつ壮大な想像力を駆使して表わされている。論理的な言葉で述べることが不可能な、難解で深遠な空の哲学、無の哲学が、詩的想像力によって置き換えられたもの、それがこのお経だった。

まず、プロローグとも言うべき序品第一において、世尊はマガダ国の首都、王舎城の靈鷲山で、集まったあらゆる階層からなる大聴衆を前に、広大無量の最高の教典を説いたのち、そのまま深い瞑想に入る。すると忽ち天上の花が雨のように仏や衆会の上にふり注ぐ。また全土は激しく震動した。そのとき仏の肩間の白毫から一条の光が放たれ、

宇宙万有がくまなく照らし出される。私はこの光に深い感動を覚える。英語でも enlightenment (明るくする) は啓蒙、教化の意味をもつが、仏教におけるほどの深い知慧や認識には到底及ばないのではないか。私は今までどうかつにも、あの瞑想的な仏像の額にある白毫の働きについては知らなかった。仏入滅の直前に行われるこの奇蹟はしかし、この時初めて起つたのでなく、遠い昔に日月燈明によって既に同じことが行われており、それも一回切りでなく悠久の昔から無限に繰返されてきたことが告げられる。見宝塔品、從地湧出品などに於て、地から湧き出した大宝塔が空中に懸^かつて、過去に於て禪定に入つた多塔如来が出現し永遠と今を結ぶ暗示があり、また地がさけて無量千万億の菩薩が出現し、また如来壽量品は釈迦は実は久遠の昔に仏になっていたことが説き明される。

我々にとっては、この方が、キリスト教の最後の審判や終末観よりもずっと合理的、科学的に思われる。怒りや復讐の神をもつ攻撃的な宗教と、瞑想的な慈悲の教えと、どちらが人の心を救うにふさわしいだろうか。我々は昨日まで、キリスト教的な一神教が宗教の本来の姿のように考えさせられてきたような気がする。西洋の世界制覇が破れた今日、西欧自身がキリスト教的世界観から解放され、またキリスト教自体が、その民族的偏狭から脱皮しようとして、仏教の普遍性を認め、方向を模索しているように思われる。

(しまだ みは 文学部教授)